されたというのである」

（「国文学解釈と鑑賞」平成十四年四月号）

また所功氏はこの「放逐」の背景として、次のような言及をしている。

翌昌泰四年（九〇一）正月二十五日、道真は突如右大臣の座から太宰権帥に引き降ろされた。これは一種のクーデターであって、その首謀者は左大臣時平であり、大納言源光や中納言定国なども共謀していたとみられる。また急を聞いて内裏に駆け付けられた宇多法皇を侍従所の西門前で強引に阻止したのは『扶桑略記』に紀長谷雄と伝え、『江談抄』や『北野縁起』には藤原菅根であったと伝えられている。さらに道真は一言の弁解も許されず、旅装を整える遑もなく、二月一日には罪人として大宰府へ下向せねばならなかった。

（所功著『三善清行』）

と説明する。

［総括考察］

「開元詔書」を詠んだ道真の苦しい思いが生々しいほどに私たちの心に訴えかけてくるような詩内容となっている。藤原時平の策略によって太宰府への左遷を余儀なくされ、辛く苦しい日々を強いられる道真にとって、「詔書」に書かれた「鯨鯢」の語は思いもよらぬ語だっただろう。無実の罪が明らかになって都へ帰れるかもしれないという、まさに祈るような微かな希望さえも打ち砕かれたのではないかと察せられる。為す術も無く、胸を刺すような痛みを感じながらその場にうずくまる道真の姿が感じ取れる。とりわけ十六句目の「蹉跎喪精霊」の句が哀しいほど心に響いてくる作品である。